

---

# 魔法戦記リリカルなのはF & O s

永遠の仮面戦士

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法戦記リリカルなのはF&Os

### 【Nコード】

N1063X

### 【作者名】

永遠の仮面戦士

### 【あらすじ】

これは魔法少女リリカルなのはOOOの続編です。ミッド・チルダではいまある鉱石が出現した。それはすべての世界を破滅へと向かわせる物だ。管理局、フッケバイン、オーズ、フォーゼの新たな戦いが始まる

## カタルシスNo.00・プロローグ・リリカルなのは

カタルシス……………

それはこの世界、ミッド・チルダに突如出現した緑色の鉱石……………  
カタルシスは触れた人や動物と融合しある存在に変身させる物だ…

……

ある存在とはネメシスと呼ばれる怪人や怪獣だ。最初は意識がある  
が長い時間融合していると意識が消え暴走する。これを対象する方  
法は2つ、魔力などの特別なエネルギーを与え倒すか死ぬかのど  
れかだ

管理局はカタルシスを全て破壊するために活動を特務六課に指令を  
出していた

部隊長室

「ふう……………」

執務の仕事に一段落をして休憩に入ろうとする椅子に腰掛ける茶髪  
の美女、この部隊長の八神はやてだ

目の前には緑の鉱石、カタルシスの資料が置いてある

現在は人間には被害者がおらず、野生動物が変化したという報告が  
多い

今のところ野生生物で対象できるが、これが人間と融合するとな  
り大変な事態へ一辺する

「とんでもない物が現れたな……………」

はやてはそう呟く

するとコンコンとドアがノックされる

「どうぞ」

ドアロックを解除すると四人の女性が入ってくる。管理局のエース・オブ・エース、高町なのは。本局執務官、フェイト・T・ハラオウン。はやての守護騎士、シグナム。同じく、ヴィータの四人だ

「アレ、どうしたみんな揃って？」

「もー、今日は彼女がここに配属される日じゃない」

なのははちょっと呆れ顔になって言う

「あ、そうか今日やったね」

「うん。入ってきていいよ」

フェイトが頷くと外で待たせている人物を呼ぶ。ドアが開き入室してきたのは

「今日よりこの部隊の配属となりました。レイア・ミッシュ・メルファ二等空尉です。よろしくお願いします!!!」

レイアはなのはたちに敬礼し頭を下げる

彼女は以前の大戦、『グリード・ザ・メダルス事件』でメダルを使ったシステム、アルカナドライバーを使って変身した仮面ライダーアルカナとして戦った

だがアルカナドライバーは『グリード・ザ・メダルス事件』でタイラントを倒すべく最終奥義である自爆をしもう存在しない

「久しぶり。レイアちゃん」

はやては立ち上がりレイアの前に行くと右手を差し出す

「お久しぶりです。八神部隊」

レイアはその右手を取り、握手する

「ようこそ特務六課へ」

「はい！！」

返事を返すレイア

するとフェイトの端末に通信が入りディスプレイを開く

「はい、こちらフェイト」

『フェイトさん。あ、すみません大事なお話でしたか？』

彼女はシャリオ・フィニーノ。フェイトの執務官補佐をしている

「ううん、かまへんよ。シャーリー」

『すみません』

シャリオはディスプレイの奥で頭を下げる

「ところでどうしたのシャーリー。なにか用があつたんじゃ？」

『あ、そうでした。そろそろティアナとの捜査の時間です』

「え？」

そうするとフェイトはディスプレイに映し出される時計を見る

「あ、本当だ。ごめんねシャーリー。いますぐ行くから」

『はい』

フェイトとシャリオはディスプレイを畳む

「ごめんねはやて。そういうことだから行ってくるね」

「うん、気をつけてな」

そしてフェイトはドアに向かいティアナの元へ急いだ。フェイトがいなくなるのと同時にはやてが口を開く

「さてとレイアちゃんは、これから六課に配属になったけど自分の所属している部隊の事を知らないのはダメやから。なのはちゃん、レイアちゃんを案内してあげてな」

「うん。ということで、レイアちゃん案内するからついて来て」

なのはがそう言うのとレイアは敬礼する

「はい!!」

これにてレイアは特務六課へ配属となり

特務六課は新たなステージに足を入れる事になる

とある廃墟の村

そこには銃と刀剣が混ざった銃を持つ大柄な男と日本刀に類似した剣を持つ眼帯をした女、神父のような服装の男、破れたような服装をした10代の女がいた。全員ある犯罪者集団フツケバインのメンバーで、全員エクリプスウィルス感染者だ

「買い出しの邪魔仕上がつて……………」

一番最初に口を開いたのは大柄で銃を持った男、ヴェイロンだ。足元には額を銃で撃ち抜かれたような跡がある男が倒れている。その男の右腕の甲には緑の鉱石が突き出ている  
眼帯をした女、サイファアはその男の右腕を見る

「なるほど。これが最近管理局が排除しようとしている鉱石、カタルシスか。初めて見る……………」

「なるほど、彼はこれに触れて、管理局が呼んでいるネメシスというのに姿が変化したというわけですね」

サイファアの横から覗くようにしているのは神父のような服装の男、フォルティスだ

「解析できそうか？」

「なんとも言えませんね。アジトに戻ってちゃんと調べてみないことにはなんとも」

「そうか」

そう言うときサイファアは目をそらす

すると破れたような服装をした10代の女、アルナージが声を出す。  
手には緑の発光体があった

「ヴェイ兄！！こんなもん拾ったぜ！！」

「あん？おい！！」

アルナージが持っている物は10cmくらいのカタルシスだった。  
それを見たメンバーの目が見開く

「早くそれを捨てろ!!」  
「え？」

ヴェイロンが声を荒げるがアルナージはわかっていない  
するとカタルシスから小さい電撃がアルナージを包むと同時にカタルシスを落としてしまう

「な、なんだこりゃ!？」

だがすぐに電撃はおさまる

「なんだっ たんだ今のは……………？」

サイファーがそう呟く。それにフォルティスはアルナージの足元の  
カタルシスを拾う

「これは……………」

なんとカタルシスは真っ黒の石に変わっていた

「どうやらカタルシス是我々、エクリプス感染者には効かないよう  
ですね。見てください。カタルシスはもう黒くなってしまっ  
ています」

「確かに……………」

「とりあえず、アジトに戻りましょう。ステラもドウビルも心配し  
てるでしょう」

「だな……………」

四人はアジトに足を向けたが。ヴェイロンが口を開く

「だがよ。いまカレンに客が来てるんじゃないのか？」

「そういえばそうだな」

「たく、何もんだ。ウチの首領<sup>カレン</sup>に用がある客つてのはよ」

同時刻フツケバインのアジトの一室

そこにはフツケバインの首領、カレン・フツケバイン。その横には小さな少女、ステラ・アーバイン。ちなみにフツケバインのアジトは空中にあり、ステラのディバイダーでもある

そしてカレンの客として来ているゴスロリ姿の少女、アスタリスクが向かい会うように座っていた

「久しぶりねカレン」

「そうね、アスタちゃん」

カレンはフツツと笑みを浮かべている

「で、今日はなんの用？あなたもいつもヒマって訳じゃないでしょ？」

ニヤつく表情で言うカレン

「さすがね。あなたに渡す物があつてきたわ」

アスタリスクは隣に置いてあつた黒い箱をカレンに渡す

「なにこれ？」

カレンはその箱の中身を取り出す。それは銀色の一本のベルトだった

「それは、エリクスドライバー。エクリップス感染者が変身出来るようになったているライダーのベルトよ」

「へえ、そんなものを私に預けていいの？」

「別にいいでしょう。本当の適合者は別にいるからね」

最後の方を小声で呟くアスタリスク

「ん？」

「なんでもないわ」

そう言うアスタリスクは立ち上がる

「じゃ、私は失礼するわ」

「じゃーねー」

ステラは手をブンブン振り、カレンは軽く手を振ってアスタリスクを送り出す

するとアスタリスクは消滅し消える前に

「あとは、オーズとフォーゼね……………」

と呟いた

これにより新たな物語が始まる

カタルシスNo.000・プロローグ・リリカルなのは（後書き）

更新速度は遅いですが完結めを目指します

次回はオーズ版プロローグです。お楽しみに

## カタルシスNo.01・帰国と映司といざ別世界へ

### オーズの世界

世界の終末を与えようとしたドクター真木との戦いから数週間後  
旅に出ていた元仮面ライダーオーズ、火野映司は久々に日本に帰っ  
て来ていた  
そして

「こんにちはー」

クスクシエのドアを開く

するとこの店のマスター、白石知世子がやって来る

「はい。あら、映司くん!？」

突然の来店の驚く知世子

「お久しぶりです。知世子さん」

「本当、久しぶり!! そうだ比奈ちゃん!!」

知世子はキッチンにいるクスクシエでバイトをしている女性、泉比  
奈を呼ぶ

「はい! あ、映司くん!？」

「久しぶり比奈ちゃん」

比奈も映司が来ており驚いていた

「はい、お久しぶりです。今日はどうしたんですか？」

「うん、ちょっと里帰りしたくなってね。だから帰って来たんだ」  
「そうなんですか」

このような会話が久々に続く

「さー、比奈ちゃん。今日は映司くん帰国パーティーよ！お店終わったら後藤くんたちに連絡お願い♪」

「はい、わかりました知世子さん！」

「じゃ、それまでお仕事、お仕事♪」

知世子は映司が帰ってきて嬉しいのかステップを踏む  
比奈もいまの自分の仕事、皿洗いに戻ると

「俺も手伝うよ」

映司が腕まくりをし皿洗いを手伝う

「映司くん。ありがとう」

「うん」

二人は黙々と皿洗いを続けると映司が口を開く

「いろんな国を回ったけどやっぱりここは落ち着くな」

「そうなんですか？」

「うん。比奈ちゃんがいて。知世子さんがいて。信吾さんがいて。

後藤さんがいて。伊達さんが集まるここはいいところだよ。だけど

……」

映司の顔に悲しみの表情が映し出される

「アंकですか？」

「うん。なんだかんだ言ってもこの一年で俺といつも一緒だったのはあいつだったから。やっぱり足りない気がするな……………」

「そうですね……………」

「だけど、あいつはいつも俺のそばにいるって、そんな気がする」「そうですね」

二人の表情が明るくなる

「ささつと皿洗い終わらせようか」

「はい!!」

そして二人はカチャカチャと音をたてながら皿を洗った

数時間後

映司が帰って来たことで知世子が企画したパーティーに信吾や後藤を招きいたが、伊達は医者の仕事で海外にいて呼ぶことはできなかったが、集まった面々は盛大に騒いだ

そしてクスクシエの二階

そこはオーズとして戦っていた頃の映司とアंकの住家だった場所だ  
映司はベッドで横になっていた

「ふう……………。今日は楽しかったなー」

映司はポケットから世界を救う存在となったオーズの変身ツールオーズドライバーと割れたタカのコアメダル、いやアंकを取り出す

「そういえば一年近くここで一緒に生活したんだよな俺達……」

映司は思い出していた

アंकと過ごしていた日々を

「タダじゃ助からない命もある」

「俺に命令するな!!」

「映司、これを使え!!」

「はっ、待たパンツか」

「今日の分の、アイスよこせ」

「もうお前の掴む腕は俺じゃない」

そしてアंकは消滅した

「アंक……。あれが本当にお前がやりたかったことなんだよな」

映司はそう呟く

「さーで、今日は疲れたし寝るとしようか」

そして映司は明かりを消し彼は床についた

それを一人のゴスロリ姿の少女が宙に浮きスカートを靡かせていた

「見つけたわ。火野映司さん」

そう呟くと映司の周囲に黒い空間を出現させると、彼はその空間に  
吸い込まれてしまう

## カタルシスNo.01・帰国と映司といざ別世界へ（後書き）

今回はオーズ話でした

フォーゼはもう少し話が進んでからの登場にしたいです  
では次回もお楽しみに

## カタルシスNo02・メダルとネメシスと黒甲冑

ミッド・チルダ、首都クラナガンから少し離れた草原

そこには一人の青年が眠っていた。火野映司その人だった  
映司は目が覚め身体を起こす

「ふあゝあ。よく寝た……………」

大きく身体を伸ばし、寝ぼけた目で周囲を見回す

「どこだ、ここ?」

そう言うのも当然である

なんせ彼は昨日の晩はクスクスエの二階に泊まらせてもらえた  
だが、いま彼が寝ていた場所は草原のど真ん中困惑するのは当然だ  
映司がキョロキョロと見回していると横に長い長方形の白い箱が目  
に飛び込む。白い箱に赤いリボン、おまけに『プレゼント・フォー・  
ユー エイジ・ヒノ』と書かれたカードまで添えられている

映司はその箱に興味を持ち蓋を開けるととんでもない物が入ってお  
り映司はつい声を上げた

「これは、コア……メダル!？」

そこに入っていたのはタカ、クジャク、コンドル、クワガタ、カマ  
キリ、バツタ、ライオン、トラ、チーター、サイ、ゴリラ、ゾウ、  
シャチ、ウナギ、タコ、プテラ、トリケラ、ティラノ、コブラ、カ  
メ、ワニの金枠のコアメダル。さらに箱は二重となっており金枠の  
メダルをよけると下の段にはホウオウ、カラス、ペンギン、カブト、  
トンボ、クモ、ハイエナ、キツネ、オオカミ、コウモリ、モグラ、

ムササビ、サメ、エイ、イカ、ユニコーン、バイコーン、ペガサス、ハブ、クロコダイル、トカゲの銀棒のコアメダル。計42枚のコアメダルが納められていた

「なんでメダルが……………」

金棒のコアメダルはドクター真木との戦いで全て消滅した

銀棒のコアメダルは『グリード・ザ・メダルス事件』で1枚つつ残して割れる。映司は知らないが、後に起きた『ハザード事件』で全ての銀棒のコアメダルは破壊された

映司はメダルを元の状態へ戻すと立ち上がり腰についたパンパンと払い落とす

「とにかく。まずは人のいる場所に行かないと。ということはあつちか」

映司のいる場所はクラナガンからそう遠くない場所だ。ビルの一、二本見えて当然だ

「よっこらしょつと」

彼はメダルの入った箱を抱えクラナガンを目指した

それから数分後

映司は首都クラナガンに足を踏み込んでいた

「やっぱり、ここクラナガンだ……………」

映司はかつてこの世界に来たことがあった

「でもなんで……………」

映司はそのまま真っすぐクラナガンの街道を歩いた  
すると

ドガァァン!!

と爆音が響き、窓ガラスや壁が吹き飛ぶ。それと同時に悲鳴を上げながら人々が映司の方に向かって走ってくる

「なんだ!?!」

彼は走ってくる男性を引き留める

「何があつたんですか!?!」

「怪物が出たんだ。早く逃げないと!! うわぁ出た!!」

男性は映司を置いて逃げてしまう

映司はその人々が逃げてきた方を向くと、そこには額に黒く濁った  
鉱石が角のように生えた人の形をした

サイのような怪人、ライノス・ネメシスが現れる

「ブオオオオオオオオオオオオオオオオオオオ!!!!」

ライノス・ネメシスは大きく咆哮する

「なんだ?あの怪物……………。とにかく何とかしないと」

映司がそう呟くと持っていたケースからタカ、トラ、バッタのメダルを取り出しても持っているオーズドライバーも取り出し腰に当てる。とベルト状になり腰に巻きつく。

それと同時に右側にオーズの変身に必要な円状のツール、オースキヤナーが出現する

さらにオーズドライバーにメダルをタカ、トラ、バッタの順番にオーズライターにセツトし、セツトし終わるとオーズライターを斜めにたおしオーズキャナーでメダルをスキャンする

「变身！！」

「タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！  
タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！」

そして映司は仮面ライダーオーズタブコンボへと姿を変え、ライ  
ノス・ネメシスへ立ち向かう

その頃フォーゼの世界の天ノ川学園高等学校ではフォーゼはスイッチを悪用して変身する怪人ゾディアーツとの戦闘の最中

[illegible]

黒い甲冑を装備した者と戦っていた

## カタルシスNo03・乱・入・上・等

フォーゼの世界の天ノ川学園

いまそこではスイッチを悪用した学園の生徒を止めるため仮面ライダーフォーゼこと如月弦太郎は仮面ライダー部の皆と共に今日もゾディアーツと戦っていた

「おらあー!!」

ロケットモジュールを展開しオリオン・ゾディアーツを殴り、吹き飛ばす

「グウウ……」

オリオン・ゾディアーツは呻きながらフォーゼの拳を堪える

「おつ、なかなか、やるな」

そついいながらロケットスイッチをOFFにしロケットモジュールを消滅させる

それと同時にフォーゼドライバーの正当な持ち主であり数々のスイッチを所持する、歌星賢吾が駆け付ける

「オリオン・ゾディアーツか。如月分かってるな？」

「おう。まかせとけ！」

フォーゼは賢吾に親指をたてる

オリオン・ゾディアーツはフォーゼが一番最初に戦ったゾディアーツだ。だいたいの能力や武器、特製はすでに覚えている。かは不明

だが、フォーゼはランチャースイッチを外し、チェンソースイッチ  
取り替えスイッチをONにする

『チ・エ・ン・ソ・ー・オン』

するとフォーゼの右足のつま先に水色のチェンソーが展開される  
さらにチェンソーの刃は回転し、その刃でオリオン・ゾディアーツ  
を蹴るようにし切り付ける

「グアー!!」

その怒涛の攻撃を受けてオリオン・ゾディアーツは倒れ、身体から  
は白い煙りが吹き出している

「よっしゃ、とどめだ!!」

チェンソースイッチをオフにすると右腕のオレンジのロケットと左  
足の黄色のドリルのスイッチをオンにする

『ロ・ケ・ツ・ト・オン』

『ド・リ・ル・オン』

ロケットモジュールで浮上し左足のつま先に展開されてるドリルモ  
ジュールが地面を挟まないようにしている  
そしてフォーゼは一気に上昇しほどの高さまで上がるとエンタ  
ーレバーと呼ばれるベルトについているレバーを引く

『リミットブレイク!!』

フォーゼは左足のドリルモジュールをオリオン・ゾディアーツへ向

け、ロケットモジュールの噴出力を使い対象を蹴るフォーゼの必殺技ロケットライダーキックを叩き込もうとするが

「G a a a a a a a a a a a ! ! !」

と咆哮をしながらどす黒いオーラを纏ったモノが突進してくる。ソレはオリオン・ゾディアーツ爪を向ける

「おわあああああ！！ちよそこどけええええええええええ！？」

空中でロケットライダーキックの体制に入っていたフォーゼだがソレ退けるどころか、オリオン・ゾディアーツに接近しつつあるフォーゼ問答無用で蹴り飛ばしたのだ

「ぐあ！？」

吹き飛ばされたフォーゼは信吾のいる場所まで飛ばされる

「如月大丈夫か？」

信吾はフォーゼに手を貸して立たせる

「ああ、大丈夫だ。それよりなんだよあいつ……」

フォーゼは黒いソレを見て言う

「わからない。先程からバガミールから送られてくる情報を分析しているが全く正体が掴めない」

表情されているディスプレイには人の形が表情されているが全てが

『????』の文字を表示させていた

黒いソレはオリオン・ゾディアーツに怒濤の攻撃を繰り出していた

「G a a a a a a a a a a ! ! !」

右側から顔面を掴み、そのまま左側へ擦じ伏せる

さらにオリオン・ゾディアーツの顔面を左足で蹴りを入れると空中に浮き、一瞬にしてソレは顔面をわしづかみにしオリオン・ゾディアーツの持つている剣を奪い取り、自分のオーラを纏わせる

これでオリオン・ゾディアーツの剣はソレは武器となった

そして黒いソレはオリオン・ゾディアーツを地面にたたき付けると、ソレは奪い取り取った剣を心臓に突き刺す

オリオン・ゾディアーツは消滅しゾディアーツスイッチが姿を現すがソレはスイッチを踏み付け破壊する

「G a a a a a a a a a a a ! ! !」

勝利を感じ取ったソレは叫びをあげる  
だが

「待ちやがれ！まだ俺が残ってるぞ！！」

フォーゼの拳がソレに届きそうになる

が、ソレは右腕で拳を受け止める。ソレは余っていた左腕でフォーゼの腹に強烈な一撃を与える

「ぐあ！！」

吹き飛ばされるフォーゼ

すると、ソレは黒いオーラを消滅させる。奴の正体は黒い甲冑だった

黒い甲冑が黒いオーラを纏っていたのだ  
それだけではない。黒甲冑の目の前には黒く澄んだ剣が浮いている  
それを手に取る黒甲冑は地面にそれを突き刺す。すると剣は黒く光  
だしその場の全員の視界を遮る

「くっ……………」

視界が遮られ目を開ける事のできない信吾  
だが、剣を突き刺す瞬間あの黒甲冑は

「H a……………Y a……………T e……………!!!」

と呟くのが聞こえた

そして目が元に戻るとそこには黒甲冑はいなかったがそれだけでは  
ない

「如月？」

フォーゼの姿も消えていたのだ

## カタルシスNo.04・オーズとコンボチェンジと再会

特務六課隊舎

そこではいま街に出現したネメシスを対処すべくバリアジャケット姿のなのは、フェイト、スバル、ティアナの四人がへりに乗り込んでいた

「今回の作戦の確認をするね」

フェイトは立ち上がり宙に5、60cmくらいのディスプレイを表示させる

「今回の任務はネメシスの撃退。だけど出現地域が市街地のため、街の中で倒すわけにはいかない。だから」

彼女はディスプレイを操作してクラナガンからそう遠くなく人気の少ない場所である林を指す

「ここにおびき出して一気に殲滅。単純な作戦だけど、今回現れたネメシスの生体がわからないじょうは用心してね。なのは、スバル、ティアナいける？」

心配そうな表情で聞くフェイト

「大丈夫だよ」

「はい、がんばります!!」

「フェイトさん。大丈夫ですよ」

なのは、スバル、ティアナの順番で答える

「うん。アルト発進お願い」  
「了解!!」

アルトはそう言うのとヘリのレバーを引き目的地へと急いだ  
その最中なのは達はある通信を受けた

「ネメシスは現在、首都クラナガンより離れた草原へ移動。応戦者  
一名ただちに急行せよ」

というものだった

『タカ!トラ!バッタ!タ・ト・バ!タ・ト・バ!!タ・ト・バ!  
!!』

オーズはタトバコンボに変身しライノス・ネメシスとの戦いを始めた  
オーズは専用の剣メダジャリバーを握りライノス・ネメシスに斬り  
掛かる

「はぁ!」

だが、ライノス・ネメシスは右腕の装甲でメダジャリバーを弾く

「なんて硬い腕なんだ……………」

オーズがそう呟くとライノス・ネメシスはオーズを殴り掛かるがオ  
ーズはしゃがんで回避する  
がオーズはすかさずトラクローを展開しバッタレッグの脚力で飛び

上がりライノス・ネメシスの腕の装甲を破壊する

「グオオオ……」

のけ反り背中から倒れるライノス・ネメシス

オーズはこの隙をつき、メダルのケースから3枚のメダルを抜き取る

「これと、これとこれだ！」

立ち上がるライノス・ネメシスに向かうように立つとタカ、トラ、  
バッタのメダルを抜き取り紫のメダルをセットしスキャンする

『プテラ！トリケラ！ティラノ！プツ・トツ・ティラーノ・ザウル  
ース……！』

「うおおおおおおおおお！！！」

雄叫びを上げるオーズ

そのせいでクラナガンのビルは大きく揺れる

この姿はオーズの最強形態であり古代の力を持つ狂戦士バーサーカーとも呼ぶこ  
とができる、オーズプトティラコンボに変身する

オーズはそのままライノス・ネメシスに殴り掛かる

「はぁ……！」

よろめくライノス・ネメシスにオーズは両腰のテイルディバイダー  
を巨大な尻尾のようにしたたき付ける

「ぶお……！」

地面に擦じ伏せられたライノス・ネメシスは立ち上がるのと同時に

額の緑色の鉱石、カタルシスにエネルギーを溜めると、角は巨大化  
しまるでランスのようになっている

ネメシスは個々が持つカタルシスに特殊なエネルギーをチャージすることで肉体や武器を強化する事ができるのだ

それを見たオーズは、地面に腕を突っ込むと、そこからティラノザウルスの頭部がついた斧、メダガブリューを抜き出す

「ブモオオオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

雄叫びを上げオーズに突進するライノス・ネメシスに対し

『ゴックン！プツ・トツ・ティラノ・ヒッサツ！！』

オーズは一枚だけ持っていたセルメダルをメダガブリューに食わせ  
必殺、ストレンドウームを発動し、銃口をライノス・ネメシスにあ  
わせトリガーを引く

「はあ あああああああああ！！！」

メダガブリューから放たれた紫の波動は突進してくるライノス・ネメシスに一直線に伸び破壊の波動はライノス・ネメシスを包み込む  
だがライノス・ネメシスはまだ生きている

オーズのストレンドウームの瞬間、奴は両腕の硬い装甲を展開し防御したのだ

だが、いまの攻撃でその硬い装甲はない。倒すチャンスではあるがオーズは思った。「いまこの場で倒してしまってもいいのかと？」

それもそうだ、ここは首都クラナガン、ミッドの中でも特別に大きい都市だ。つまり人が多くいる

しかも奴は先程、額のカタルシスにエネルギーをチャージした  
この場で奴を倒して爆発が起きれば、大きな被害が出てしまう。な

らば別の場所で倒せばいい

オーズはケースのある場所へ行き二枚のメダルを取り出しベルトのブテラ、トリケラ、ティラノのメダルを抜き、別のメダルをセットしメダルをスキャンする

『タカ！クジャク！コンドル！タ〜ジャ〜ドル〜！！！！』

この姿はオーズ、いや火野映司とともに戦い続けたひとつの腕として復活し、最後までオーズの味方としていたグリード、アंकのメダルを使ったコンボだ

オーズはクジャクウイングを展開し、体制を低くしながら、左腕に装備されたタジャスピナーを回転させタジャスピナーのセルメダルを連続スキャンする

『ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギン！ギガスキャン！！！！』

オーズはそのままライノス・ネメシスの懐に入りそのままタジャスピナーでの必殺技、マグナブレイズを発動する

全身が炎を纏うとまるでその姿は不死鳥そのものだ。オーズはライノス・ネメシスの腹部にタジャスピナーを当てるとそのまま天上へ飛ぶ

ダメージを与えながら人の少ない場所、映司がいた草原へ押し出すとマグナブレイズの発動をリセットしタジャスピナーからの炎弾を放ち宙に浮かせるとオーズは空中にいるライノス・ネメシスから距離をとりベルトのメダルをスキャンする

『スキャニングチェージ！！！！』

オーズは両足の形状を変化させライノス・ネメシスにオーズタジャドルコンボの必殺キック、プロミネンスドロップを繰り出す

「セイヤあああああああああ！！！」

プロミネンスドロップを受けたライノス・ネメシスは爆発する  
その光景はヘリで現場に向かっていた数キロ先のなのは達の目に止  
まった

オーズはその後地に足をつき変身を解除し仮面ライダーオーズから  
火野映司の姿に戻る

「ふう……。なんとか……。なつたかな………」

ライノス・ネメシスを倒す事に成功した映司は久々の変身で息を切  
らせていた  
すると、カチャという音が映司の耳に留まる

「管理局です。両腕を頭でくみ、こっちを向きなさい」

映司はその管理局員の指示に従い恐る恐る振り返るとそこにいたのは

「なのはさん？フェイトさんに、スバルさんティアナさんも………」  
「映司くん？」

それはヘリでこっちに向かっていたなのは達だったのだ  
これで映司となのは達、オーズと特務六課は再会を果たした

## カタルシスNo05・説明と協力者と甲板

特務六課の応接室

そこには一人の青年が椅子に腰掛けていた。今度もまた火野映司その人だった

さらに映司の目の前の机には一杯のコーヒーとコアメダルのケースが置かれてある

そしてシャーという音とともにドアが開き、入ってきたのはなのは、フェイト、はやてといった特務六課のエース陣だった

はやては右手を上げ挨拶する

「やつ、久しぶりやな映司くん」

「はやてさん！」

立ち上がる映司

「お久しぶりです！なのはさんたちも、お元気そうだなによりです」

軽く頭を下げて言う

「うん」

「本当に久しぶりだね映司さん」

映司は頭を上げる

「それと、さっきは強制連行させるみたいになってごめんね」

「い、いえ！気にしてませんから！！」

映司がそう言となのはは微笑みながら「ありがとうと言う」。そし

てなのは達は椅子に腰掛ける

「さて、映司さん。あなたにはいくつか聞きたい事があるんやけど。ええかな？」

「は、はい」

はやての目つきが鋭くなり、映司に問い掛ける。映司はそれに返事を返す

「まずは、映司くんは何故またこつちの世界に？『グリード・ザ・メダルス事件』解決後、たしかに私たちは映司くんとアंकさんを送り出した。なのに、あなたはこうしてここにいる。どういう事が説明してもらえるか？」

「それは別に構いませんけど、取り合えず俺達の世界で起きた出来事を話してもいいですか？」

「そうやね。たしかにそつちの方が話をわかりやすくできるかもしれないから、ええよ」

「ありがとうございます。では俺が元の世界に戻ってからの事を」

映司は話した。映司とアंक、後藤、伊達が帰還した後の事を。アंकがアंकクロストに吸収され、映司の半グリード化、アंकの救出、アंकの裏切り、ウヴァの復活、カザリの完全復活、カザリの死、ドクター真木の屋敷への突入、メズールとガメル完全復活、メズールの死、伊達の帰還からのプロトバースへ、ガメルの死、映司の完全グリード化、アंकのメダルに輝が入る、ウヴァの完全復活、オーズが真のタトバコンボへ、ウヴァの暴走、市街にクズヤミーが大量召喚され、オーズとアंकがドクター真木を止めに向かう戦いの最中、オーズは不利な状況となり、アंकは自らのコアメダルを托し、オースタジャドルコンボとなりドクター真木と暴走したウヴァを撃破し、メダルが全て消滅する

そしてアंकの消滅までの過程を長い時間をかけて三人に話した

「そんなことが……。苦勞したんやね映司くんも……………」

映司の話を聞いて、はやてはつい言葉を漏らす

「いえいえ、別に俺は……………」

そう言われた映司はなんと云うべきか言葉に詰まる

「こんな壮大な話を聞かされたからには、私たちも話さないかね」  
「せやな」

フェイトの言葉に頷くはやて

「映司さん、いまからこちらの世界で起こった事を話します。よく聞いてください」

「は、はい……………」

映司が返事を返すとなのは達は話し出した。トーマがエクリプスウィルスに感染したこと、フッケバインとの戦い、トーマの暴走と救出、そしていまの問題となっているカタルシスとネメシスの現状をフォトパネルを使いながら説明した

映司はそれを啞然と聞いていた

「みなさんも苦勞してたんですね……………」

啞然としていた映司が口を開く

「まあね」

なのはがそう返す

すると映司はある疑問を覚えた

「でも、なんで俺があつちの世界に帰ってからこつちに来てから数ヶ月しかたつてないのに、こつちでは一年以上時間がたってるんだ？」

映司はオーズの世界となのは達の世界での時間のズレが気になっていた

「それは、わからないけど。おそらく映司達と私達の世界では時間の進み具合がちよつと違うんじゃないかな？」

とフェイトが答えた

映司はそれに、「なるほど」と返す

「さて、今日はお疲れみたいやし部屋を用意させたから休んでつてな」

「あ、ありがとうございます」

はやての親切に礼を言う映司

「じゃ、今日はこちらでお開きにしようか」

そう言うとはやては時計を見る

「時間も時間やし、六課の食堂でディナーなんてどうやろう？」

この言葉で四人は特務六課の食堂で食事することとなり、火野映

司こと仮面ライダーオーズは協力者という扱いで六課に所属することになった

同時刻、フツケバインのアジト

ここではフォルティスがアルナージの拾ったカタルシスを分析機にかけて分析していた

と言ってもカタルシスはすでに黒く染まってそこらの石と同じ状態だった

「はやりダメですか……………」

フォルティスは黒くなったカタルシスを見て呟く

するとシャーという音と共にサイファアが入ってくる

「調子はどうだ、フォルティス？」

「そうですね。やはりこの状態のカタルシスはすでに使い道のないただのゴミクズと言ってもいいでしょう」

「そうか……………。だが現時点では我々エクリプス感染者にはその石の効力は無いのдар？」

「そのようです。アルが触れた時にそれは確認できました。やはり鉱石の状態でなくてはいけないのでしょうか？それとも純度のあるカタルシスでなければ……………」

そう呟くフォルティス

するとフツケバインの戦艦がドオンと音と共に揺れる

「なんだ、敵襲か！？」

そう叫ぶサイファー

フォルティスはディスプレイを出現させ操作する

「どうやら、甲板になにかが激突したようです。いまヴェイとアルが見に行ってくれてます」

「チツ、たく食事中になんだってんだ？」

イライラしながら甲板を目指すヴェイロン

「まったくだぜ。なんであたしらが行かなきゃなんねーんだよ！？鳥とかだつたら今晚の晩飯のから揚げにして食ってやる！！」

アルナージもばやきながら甲板を目指す

しばらく歩くと甲板の一步手前のドアに差し掛かりドアを開けると同時にヴェイロンは自分のディバイダー928を出現させる

そして甲板の方に警戒しつつ入るとそこには一人の少年が倒れていた

「なんだ…………こいつは…………」

ヴェイロンは倒れている少年を見て呟く

その少年のスタイルは、リーゼント、脇下までしか無い学ランを来た少年、如月弦太郎がフツケバインのアジトの甲板で倒れていた  
そして

「ヴェイ兄これ食っていいか！？」

「いや、ダメだろ？」

カタルシスNo05・説明と協力者と甲板（後書き）

感想待ってます……

カタルシスNo06・凶・鳥・尋・問

フツケバインのアジトのとある一室

そこではフォルティスが本を読んでおり、その隣にはある物が入ったケースが蓋を開けた状態で置いてあり、一人の少年、仮面ライダーフォーゼの如月弦太郎がが椅子に手足を縛られ気絶していた

「ん……………、ここはどこだ？」

目を覚ます弦太郎

「お、目が覚めましたか？」

本をパタンと閉じ立ち上がるフォルティス

「誰だあんた？」

フォルティスに視線を向ける弦太郎

「僕はフォルティスといいます。お見知りおきを」

軽く礼をする。弦太郎は釣られて頭を下げてしまう

「あ、どうも……………」

弦太郎が頭を上げるとフォルティスが座っていた方を見るとケースが目に入る  
その中身は

「フォーゼドライバー!?」

ロケット、ランチャー、ドリル、リーダーがセットされたフォーゼドライバーとアストロスイッチが数個入っていた

「ああ、これですか?」

フォルティスはフォーゼドライバーのレバーの部分を持って持ち上げる

「これはあなたの腰についてた物ですよ?他にもこのスイッチ。なんです、このおもちゃは?」

「!!!」

フォルティスの「おもちゃ」という単語を聞いた瞬間、弦太郎の怒りの感情が高まり表情が険しくなる

「それに触るな!!!それはあいつの、賢吾の大丈夫な預かりもんだ!!!」

椅子の上で暴れ、怒鳴る弦太郎。それを聞いたフォルティスは啞然としていた

そしてフォルティスはそつとフォーゼドライバーをケースに戻す

「これは申し訳ない」

「ああ、わかってくれればいい……………」

素直な対応をしたフォルティスに弦太郎も啞然となってしまう

「では、あなたには少し聞きたい事があるんですが。いいですか」

「ああ……………」

フォルティスの言葉に返事を返す弦太郎

「えーまずは、あなたは何者ですか？」

「俺は如月弦太郎だ！！で仮面ライダーフォーゼだ！！」

大声で自分の所在を話す弦太郎

「仮面ライダー？聞いた事がありますね」

「お、仮面ライダーを知ってるのか！？」

「ええ、多少ですが。たしか、別世界の戦士で、メダルで変身して怪物等と戦うんですよね。一時期ミッド・チルダに大量に変な自動販売機が設置された事が……………。他にも管理局開催のイベントや市街地に現れた怪人を倒した等の例も聞いています。まさかあの仮面ライダーが君だったとは……………」

「いや、多分それは違うライダーだ」

「？、仮面ライダーとは一人ではないんですか？」

「ああ、仮面ライダーは三十人以上いる。俺もその中の一人だ」

「なるほど……………。ではあのベルトは変身ツールですか？」

フォルティスはフォーゼドライバーの事を聞く

「そうだ。あれは宇宙の能力で世界を守る仮面ライダーフォーゼのベルトだ」

「ということは正義の味方、ということになりますねですが……………」

フォルティスがそう呟くと彼は弦太郎を舐めるように見回す

（リーゼントに学ランで、どう見ても正義の味方って訳ではなさそ

うですね。それに彼が仮面ライダーであるならば、別世界の住人であり次元漂流者ということになりますね)

フォルティスがそう心の中でそう言つとドアが開きヴェイロンがコーラの缶を持って入ってくる

「あん、目が覚めたのか」

そう言つとコーラの缶を口にするヴェイロン

「ええ、まあ」

「で、なんか吐いたかこいつ？」

「彼、別に抵抗するそぶりのありませんし結構素直に話してくれました」

「ほお、俺達フツケバインを前にして素直に話したあ、結構根性あんじゃねえかボウス」

弦太郎を見るヴェイロン

「しかも彼は仮面ライダー。別世界の戦士です」

「仮面ライダーだ？あの『グリード・ザ・メダルス』の仮面ライダーか？」

「いえ、それは別の仮面ライダーだそうです。彼は宇宙の能力で戦う仮面ライダーフォーゼという存在だそうですよ」

「ほお……。こんなガキが戦士ねえ」

ヴェイロンは弦太郎を睨みつける

弦太郎も反撃するかのようにヴェイロンを睨む  
そして

「だったら勝負だ。俺と戦え」

「え？」

「そしてこの俺を倒してみせろ。仮面ライダー……！」

ヴェイロンは挑発口調で弦太郎に言う

「おう、上等だ！受けて立つぜ……！」

弦太郎もヴェイロンに言い放つ

「だが、その前に！この縄ほどいてくれない………？」

「これは失礼」

弦太郎の言葉でフォルティスは縛り付けている縄をほどいた

数分後の甲板

そこにはアルナージやドゥビル、サイファー、フォルティス、ステラが観戦に来ていた

そして戦闘体制のヴェイロンとフォーゼドライバーを腰に装着した弦太郎が向かえ会うように立っている

弦太郎は観戦に来ているギャラリーを見てヴェイロンに問う

「なあ、あのさっきの人とギャラリーの人達ってあんたの友達か？」

「友達だあ？まあ、言い方変えればそうなるかもな。つつか、さつさと変身しやがれこっちはさっきからお前をぶちのめしたくてウズウズしてんだよ」

「そりあ、悪かったな。じゃ行くぜ……！」

弦太郎がそう叫ぶと、フォーゼドライバーに各スイッチソケットに付いているトランススイッチを全てOFFの状態から順番に押しONにするし右手でエンターレバーを握り左腕を右肩の位置に持つていくと同時に変身へのカウントダウンが始まる

『3』

『2』

『1』

「変身!!」

『1』の宣言と同時に叫び、エンターレバーを引くと弦太郎を白い煙りが包み、彼は右腕を天に掲げるポーズをする

そして煙りを払うとそこには白がベースにカラーリングされ頭部がロケットのような形をしたライダー、フォーゼが現れ身体を縮こませ

「宇宙キタアアアアア!!」

と叫ぶと同時に両腕を大きく開く

「それが仮面ライダーフォーゼか?おもしれえカッコしてんじゃねえか」

ヴェイロンは口元ををニヤつかせ自分がフォーゼに対しての感想を言う

「ああ、スゲーだろ!んじゃ、タイマン張らせてもらっぜ!!」

フォーゼはいつものキメ台詞を右腕を突き出して言う

「ハッ、その言葉そっくりお前に返してやる!!」

ヴェイロンもディバイダー928とクローグラブを構えフォーゼに  
特攻しフォーゼ対ヴェイロンの勝負が始まった!!

## カタルシスNo06・凶・鳥・尋・問（後書き）

えーと

本当は今回がフォーゼとヴェイロンとの戦いにしようと思ったのですが、それは次回という事にします  
次回お待ちください

## カタルシスNo07・戦・闘・開・始

『ロ・ケ・ツ・ト・オン』

フォーゼは右腕にロケットモジュールを出現させヴェイロン目掛けて殴り掛かる

「ライダーロケットパアアアアンチ！！！」

が、ヴェイロンは左手に装備しているクローグラブでフォーゼの拳を受け止める

「悪くねえが。遅いぞ！！！」

ヴェイロンはロケットモジュールを握ったままクローグラブにエネルギーを凝縮する

「くられ。ナパームファング！！！」

フォーゼはヴェイロンの右腕から放たれた火炎と液体燃料の混合で放つ技、ナパームファングを受ける

「ぐあ！」

ナパームファングを受けたフォーゼはあまりの威力に後ろに吹き飛ばされ、背中ホバーを駆使し甲板におりる

そしてフォーゼはロケットモジュールを見ると先端部分はグチャグチャになっていた

「なんつつ破壊力だ……。だつたら!!」

フォーゼはロケットスイッチをベルトから外し、別のスイッチをセツトする

『チエーンアレイ』

セツトすると、ダイヤル状のスイッチを回転させ起動する

『チ・エ・ー・ン・ア・レ・イ・オン』

フォーゼの腕に鎖鉄球、チエーンアレイモジュールが装着される

「ほお、そんなものもあるのか。おもしれえ!!」

吠えるヴェイロン

さらにディバイダー928の切っ先をフォーゼへ向け、疾走する  
それを受けてたつフォーゼ

ヴェイロンはディバイダーの刀身を振り下ろすすが、チエーンアレイの鎖で受け止め、そのままチエーンアレイを巻き付ける

「ディバイダーを封じても、まだ左が残こつてんぞ!!」

ヴェイロンは再度のナパームフアングを発動しようとフォーゼの顔面に手を伸ばしたが

『ホ・ツ・ピ・グ・オン』

とフォーゼドライバーが発音する

するとヴェイロンはなんらかの引力に引かれ上空へ飛ぶ

フォーゼが使用したスイッチはホッピングスイッチ  
ホッピングは左足にスプリングを装備し飛び上が事ができる癖のあ  
るスイッチ

フォーゼはチェーンアレイをディバイダーに巻き付ける瞬間、ドリ  
ルスイッチと入れ替えでホッピングスイッチをセットしたのだ。そ  
して急なジャンプをしたためヴェイロンの二度目のナパームファン  
グを回避した

さらにフォーゼはチェーンアレイスイッチをOFFにするとチェー  
ンアレイモジュールは消滅しさらに縛られていたディバイダーも解  
放され、それを握っていたヴェイロンも解放され宙にさらけ出され  
たが、ヴェイロンは見事地面に着地する

「俺裏をかく奴がいるとはな。だがこれで……………」

ヴェイロンがさういうとディバイダー928にエネルギーが凝縮さ  
れ、その銃口をフォーゼへ向け、トリガーを引く

「散れ！！ショット・シエル！！！」

ディバイダー928から放たれた魔導殺しの銃撃  
それはフォーゼに見事直撃する。ドガアンと音をたて黒い煙りに覆  
われる

「チッ、なかなかやりやがる。たいした奴だ」

ヴェイロンは立ち去ろうとした

観覧席のメンバー達も「当然の結果」と呟き席をたったが

『ロ・ケ・ツ・ト・ド・リ・ル・リミットブレイク！！！！』

「まだ終わってないぜ！！」

煙りの中からフォーゼが現れる

シヨット・シエルの直撃時とつさにチェンソーモジュールを展開し  
右足の先端に現れたチェンソーでシヨット・シエルを切り裂いたのだ  
つまり爆発したのはチェンソーモジュールだ

そしてフォーゼはヴェイロン目掛けて必殺、ロケットドリルキック  
を放つ

「勝負はまだ終わってないぜ！！！」

ヴェイロンはそれに反応し振り返りながらデИБライダー928を抜く

「ハッ！おもしれじゃねえか！！！」

デИБライダーの銃口はフォーゼに向けられエネルギーをチャージする

「これでも食らいやがれ！！！」

ロケットドリルキックとデИБライダーから放たれた銃撃。その二つ  
が正面から衝突する

「「らああああああああああ！！！！」」

すると大きなエネルギーの衝突により、爆発が起き煙りが舞う

煙りが晴れるとそこには弦太郎とヴェイロンの二人は並んで大の字  
で寝ていた

エクリプス感染者はダメージを受けても瞬時に回復できる。弦太郎  
もフォーゼのスーツを着ていたためダメージを最小限に留めること  
ができた

そして

「はっはは！！はははは！！！！」

弦太郎とヴェイロンは大声で笑う

「お前なかなかやるじゃねか！気に入った！！」

「あんたもスゲーな！俺もギリギリだったぜ！！よし今日から俺達はダチだな！！」

「ああ、いいぜ。てめえとダチになればもっとおもしろえ事に出会える気がする」

そして二人は大きく笑い、友達の証を交わした  
観覧席では

「フォルティスお前の目から見て、あの男はどう思う？」

大柄の上半身裸の男、ドウビルが言う

「そうですね……。おそらく彼は我々フツケバインのメンバーになるにはいい人物でしょう。それに……」

フォルティスはそつと視線をそらし弦太郎とヴェイロンを見る

「ヴェイロンが認めたんです。僕達も彼を歓迎してあげましょう」

フォルティスは笑顔で言う

「ああ……」

「だな……」

「おう！！」

上からドウビル、サイファー、アルナージの順で言う。ステラは賛成なのか笑顔で右手を振っている

これで弦太郎もフツケバインのメンバーとなった

はたして、この選択は吉と出るか、凶と出るか……

ミッドの海中深い位置。そこにドーム状の建物が立っていた  
そしてドームの中の一室

そこにはソファ、冷蔵庫、テレビといった物が揃っている。リビング  
ルームのような場所。さらにそこには五人の者達がいた

一人は自らの愛刀、赤鎧鬼の刃を磨いでいる黒い髪をなびかせる和  
装の女性、紅鬼

一人はソファに寝転がりながら本を読んでいる青髪の女性、涼・イ  
ザナミ

一人は菓子をチマチマとつまみながらテレビを見ている黒髪の少女、  
鏡愛

一人は短い銀髪で茶色いコートを着ており、イヤホンを付けている  
少女、神崎麻樹奈

一人は厨房でお菓子作りをしている長い金髪の女性、ミーナ・ディ  
ーハミルト

各々が好きな事をしていた。すると、シャーという自動ドアの音と  
共にゴスロリ姿の少女、アスタリスクがやってくる

「みんな揃っているわね。あれ？に点蔵に千早、ユーリがいないわ  
ね？」

アスタリスクはこの場にいない三人の名前をだす

「点蔵と千早は買い物にいつてるよ。アスタ」

イヤホンを外し麻樹奈がいない二人の所在を話す

「ユーリはまた部屋に籠ってなんか作ってた」

菓子をつまんでいた愛が最後の一人の所在を言う

「そうだったわね」

アスタリスクは二人の言葉に納得する

「麻樹奈、ミーナ。ちょっといいかしら？」

「はい」

麻樹奈とミーナはアスタリスクの元へ行く

「どしたのですの？」

ミーナはアスタリスクに質問する

「ええ、実はフォーゼがこちらの世界に現れたわ。今からちょっと見てきてちょうだい。あなた達のシュバルツシュルトとヘルサイズならネメシスも倒せるでしょ？」

「ええ、たしかに……」

「了解。じゃ、ちょっと出てくるね」

「お願い」

そして麻樹奈とミーナはミッドへ向かったのだった

## カタルシスNo08・朝食と下水と二槍の男

映司が六課に所属することになってから数日後

「いただきます」

映司は課の食堂の四人座りのテーブルで両手で合掌を作り朝食と食べようとしていた。ちなみに服装はいつもと同じもので管理局の制服ではない。メニューは焼き魚に白米、味噌汁、小さな煮物の四品と冷たい麦茶。彼らしい組み合わせだ

そして彼は食事に箸を伸ばす。自分のペースで自然に感謝しながら食べる  
すると

「あのー……………」

「ん？」

背後からの声に箸をくわえたまま振り返る。そこには『グリッド・ザ・メダルス事件』で被害者となった少年、トーマ・アヴェニール。彼は以前、銀枠の虫系グリードであるドルのヤミーの親とされ、ユーロのヤミーの親ともされ、オーズホーラスギンコンボとバースの手により救われた過去を持つ。現在はエクリプスウィルスの感染者となりフツケバインとも交戦した。彼の後ろにいる二人の少女、トーマのディバイダーで銀十字の制御プラグ、リリィ・シュトロゼツクとイーグレット・セキュリティ・サービス代表取締役一家の末っ子、アイシス・イーグレットと共に六課の保護を受け実戦でも戦える程度まで力をつけていた

「一緒にしてもいいですか？」

控えめな口調で聞く

「う、うん。もちろんだよ。座って座って」

「はい。失礼します」

トーマがそう言うと、三人は席に着く。映司の隣にトーマ。トーマの隣にリリイ。リリイの隣にアイシス。アイシスの隣に映司と一回転するかのように座る

「そういえば、スバルさんから聞いたけど、トーマくんも旅してたんだよね？」

映司はパンをかじろうとしていたトーマに話題をふる

「え？あ、はい」

「どんな場所を旅したの？」

「いろんな世界を旅しましたよ。痣やかな鳥が生息する世界に海の水がキレイな世界と本当にたくさんの世界を回りました。その途中でリリイとアイシスに出会ったんです」

「へえ……」

映司は「自分が回ってきた世界は小さかったのかな？」と思ってしまっていた

「あー、火野さん？」

すると茅の外だったアイシスが声を出した

「なに？」

「火野さんって、トーマとどういう関係なんですか？」

「トーマくんとは一年程前に起きた『グリード・ザ・メダルス事件』でちょっとあつてね。こっちの世界に来たときはスバルさんに拾ってもらってそれから数ヶ月後にトーマくんと出会ったんだ」

「へえ……………」

映司の説明に納得するアイシス

「ということは、トーマと火野さんはお友達ですか？」

「そうなるかな」

右手にサンドイッチを持っているリリイの問いに答える映司

「映司さん、一つ聞いていいですか？」

味噌汁を口にしようとしていた映司にトーマが問いかける

「ん、どうしたの？」

「映司さんは旅をしてるんですけどよね？どんな物を持ち歩いていたんですか？」

「あ、それ私も聞きたい！」

トーマの問いに釣られるアイシス

映司はその問いに「いいよ」と言って答えようとするが、出てくる言葉は二つである。それは……………

「ちよつとのお金と明日のパンツかな？」

「……………はい？」

トーマとアイシスは啞然となってしまう

リリイは頭にクエスチョンマークを浮かせている

「いやいやいやいや！ームリですよ！ーそれだと死んじゃいますって！ー！！」

声を荒げるアイシス

トーマはそうだったと頭を抱える

幸いにも周囲には人がいない事だろう

「いけるって、だってそれでいろんな国回ったんだから」

「それだとスゴイですね！！なんて環境にいい人なんだ！！！！」

映司にツツコムアイシス。すると六課全域に赤い緊急アラームが『  
ビービービー！！』と鳴り響き、はやてがアナウンスする

『ミッド・チルダにネメシス反応あり！総員ただちにヘリポートへ  
！！！！』

そのアナウンスは当然映司やトーマの耳にも入る

映司達はすぐさまヘリポートへ急いだ。ただ一つ映司は気掛かりな  
事があった。それは……………

「朝食もつたいないな……………」

と映司は思っていたが、食堂のおばちゃんが四人分をラップしてと  
つといてくれていた

数分後

映司達は現場であるミッドのとある海岸に来ていた

メンバーは映司、フェイト、ティアナ、エリオ、キャロ、トーマ、リリイ、アイシスの計八人での調査だ

しかもこの場所は以前ヤミーの親となったトーマを助けるべく、バンクから借り受けた銀棒の赤いコアメダルで変身したオーズ、ホーラスギンとバースの二人が戦った舞台だった

執務官のフェイトとティアナは海岸に捜査員として派遣された局員と話をしている

エリオとキャロは反応のあった近辺を隈なく搜索していた

映司、トーマ、リリイ、アイシスは砂浜を搜索していた

「特にこれといった異常はありませんね」

「うん。だけどここにネメシスの反応があったっていうことは確かだし……………」

映司とトーマの会話だ

するとリリイがあるものを発見する。下水道だ

「これって下水道？」

アイシスは洞窟のような下水道の入口を覗いていう。音が反響し声が響く

「確かにここなら逃げ込んだり、迷い込む可能性もあるね。リリイおてがらだよ」

笑顔で返すトーマにリリイも笑顔になる

「とりあえず中へ行ってみよう。なにか手がかりがあるかもしれない」

「はい。アイシスはここに残っててなにかあったら連絡するから」  
「わかった」

トーマの言葉に返事を返すアイシス

「よし、行こう!」

そして映司とトーマ、リリーの三人は下水道への搜索を開始した  
ぴちゅん、ぴちゅんと音が反響する下水道  
映司が先頭でライトを光らせまっすぐ進む  
しばらく歩き広い場所へ出ると、そこにはとんでもない光景が広が  
っていた

「なんだこれ……………」

「魚の卵?」

それは百や二百なんて数じゃない魚のネメシスの卵があった  
トーマは卵の一つを覗きこむように見る

「これ一体一体が小型のネメシスだ……………」

「こんなのが街に出たら大変な事になる……………。トーマくんアイシ  
スちゃんに連絡して」

「はい!」

映司の指示に従いトーマは電波の悪い場所でもちゃんと繋がる小型  
端末を取り出し外のアイシスに連絡を入れようとするが

「そのような行為。させると思つか？」

下水道に響く謎の声。すると、トーマの持っていた端末をなにか赤い棒状の物が貫きトーマの手から飛び出され破壊される

「端末が!？」

さらに端末を貫いたそれは消滅する

「まさか、ここを嗅ぎ付ける者がいるとはな……。正直驚いている」

映司達は声のする方向を向く。するとそこには翡翠色の薄い甲冑を身に纏い、白いマントに左右にはそれぞれの長さが違う赤と黄色の槍を持っている男がいる

「お前は一体……?」

映司はつい、口が開きその男に何物かと尋ねてしまう

「俺か？生憎と俺は真名を名乗る事はできんよ。だが仮の名を教え  
てやるう」

フツと鼻で笑うとその男は体制を低くし槍を構え、そして名乗った

「ランサー、とだけいっておいてやるう。それではーいざー！ー」

## カタルシスNo.09・間合いと二本の呪槍と増殖の緑虫

「それではーいざー!!」

この言葉が引き金となりランサーは赤い槍で突き刺すように飛び出す  
映司は右へ、トーマは無防備なリリイを抱え左へ飛び、回避する  
映司は回避したのと同時に身体を起こしてオーズドライバーを腰に  
セットしタカ、トラ、バッタのメダルを三枚を立て膝でセットしス  
キャンする

『タカ！トラ！バッタ！タ・ト・バ！タ・ト・バ！！タ・ト・バ！  
！！』

映司はオーズタトバコンボに変身する

「リリイ！エンゲージいける!？」

「うん！！エンゲージ・スタンバイ。ディバイダーセット」

リリイがそう呟くとトーマの腕にディバイダー996がリリイに銀  
十字の書が出現し

『エクリプスコントロール、正常範囲』

銀十字がそう宣言しリリイはトーマに抱き着き

「システムゼロ。スタートアップ」

さらにそう呟く。するとトーマとリリイの身体が融合しディバイダ  
ー996シュトロゼック・リアクデット『黒騎士』の姿となる

それを見たランサーは

「ほう、ディバイダーシュトロゼックにコアメダルの王か。主の情  
報通りだ」

ランサーはマントを外し、短い黄色い槍を手から離しカランと音が  
響く。残った赤い槍を低い体制で呼吸を整えるとランサーは赤い槍  
を構えトーマへ飛び掛かる。トーマもディバイダー996を構え剣  
を振るう

赤い槍とディバイダー996ぶつかり合い、暗い下水を火花が照らす  
オースもメダジャリバーを握りトーマに応戦する

「はぁ!!」

ランサーはメダジャリバーの剣撃を軽やかなステップで回避し、槍  
の柄でオースの腹を突き、回転しトーマの頬に赤い槍の刃が掠める

「くっ……………」

赤い槍が掠めたためトーマの頬からは血が流れ出るが、傷は瞬時に  
回復される

エクリプスウィルスの感染者の身体は一般の人間とは違がある。そ  
の一つが回復のスピードである。トーマの頬の傷はすでにふさがり、  
キツとした表情でランサーを睨む

「ほお、俺の槍を受けてなお、同じぬ心意気はさすがと言える。だ  
が二撃目はどうか？」

ランサーは特攻しトーマとの間合いに入る

オースはいまのうちにメダルをトラとカマキリを入れ替えスキャン

する

『タカ！カマリキ！バツタ！』

オーズはタカキリバへコンボチェンジしカマリキソードを展開しトーマとの間に割り込みカマリキソードを構える  
だが

「貫け、ゲイ・ジャルグ！！！」

ランサーは失速するどころか赤い槍の矛先を伸ばし、オーズのオーランサークルのカマリキの部分を貫く

「映司さん！！」

それを見たトーマは声を上げる。リリイはトーマの中で口を抑える  
オーズは赤い槍の突きで壁まで突き飛ばされる。さらにカマリキのオーランサークルの色が薄くなっていく。これではしばらくカマリキは使えない

「なんだ……………今のは？」

ボロボロになりながら立ち上がるオーズが言う

「どうだ、俺のゲイ・ジャルグの突きの味は？」

ランサーは誇らしげに言う

「ゲイ・ジャルグ……………？」

「ああ、我が槍ゲイ・ジャルグは特殊なエネルギーを無効にする。

と言っても、無効にできるのは突いた時の一瞬か一時的にすぎんな」

「だったら！その槍を使わせないだけだ！！」

トーマは疾走しディバイダー996をランサーに振り下ろす

「おおっと」

ランサーはゲイ・ジャルグの柄で防御しつつ一歩一歩下がっていく

「はあ！！！」

そしてトーマは強烈な一撃をランサーに食らわせる。だが、ランサーはゲイ・ジャルグで防御しているだけ

ギギギギとディバイダー996とゲイ・ジャルグが軋み合う

「見事な剣撃だ少年。だが脇が甘いぞ？」

するとランサー足元のなにかを蹴りあげた。それは先程手放した黄色い槍。トーマはランサーの槍の間合いに誘われたのだ

ランサーはゲイ・ジャルグを左手のみで持ち、蹴りあげた黄色い槍を右手でキャッチする

「穿てー、ゲイ・ボウー！！」

ランサーの黄色い槍はトーマの脇下目掛け鋭い突きを放つ。だが槍は炎の弾に弾かれる

彼は舌打ちすると、トーマから一定の距離に飛ぶ。着地するとトーマの後ろのは赤い頭部、赤い身体、緑の足のオースタジャバコンボがいた。しかも手にはタジャスピナーというクジャクのメダルを使

用した場合のみ出現する武装が施されている

先ほどの突きでいまはカマキリが使えないと悟ったオーズはカマキリとクジャクを入れ替えたのだ

しかもクジャクにしたのは理由があった

「ほお、俺のゲイ・ボウを弾くとは。こっちの槍にもなにかをあるとふんだか？」

「まあね。赤い槍になにかあるように黄色の槍にも特殊な能力があるかもしれないから俺はさっきやられた時から黄色い方にも注意してた」

その理由がこれだ

「なるほどな。その読みは正解だメダルの王。俺のゲイ・ボウにも呪いが掛かっててな。手傷を負わせた者の傷を癒さぬ、呪槍だ」  
じゅそう

先ほどのトーマの頬につけられた傷がこのゲイ・ボウだったなら、血液が流れ出し続け死にいたっていたであろう。ランサーは自らの槍に対して警戒したオーズに感服していた

「それにその両方の槍の名前どこかで聞いた事があったけど貴方はまさか……………」

オーズがランサーの真名を悟り、それを口にしようとしたが

「戯れあいはそのままでメダルの王。時間だ」

ランサーがそう言うと、パアンと音が下水に響く。それは先程のネメシスの卵が弾けた音だ

卵のあった場所にはピラニア・ネメシスがあふれ一斉に外を目指した

「俺の目的は時間稼ぎ。さらばディバイダーシュトロゼック。それにメダルの王、オーズ」

するとランサーは光子状になり姿を消す

「待て!!」

消滅したランサーを追おうとするトーマだったが

「トーマくん！いまはネメシスを！」

「くっ……………はい……………」

ランサーに逃げられたのが悔しいのかトーマは奥歯を強く噛み締める  
オーズはバッタのメダルを抜き脚力アップの黄色いメダル、チータ  
ーのコアメダルをセットしスキャンする

『タカ！クジャク！チーター！』

オーズはタジャターコンボへ変身するとトーマを背負い出口へ急いだ

その頃海岸沿いを調査していたフェイト達はアイシスからの通信に  
より、下水の入口に来ていた

「このなかに映司さん達が？」

「はい。入ってからおよそ三十分かと……………」

フェイトの言葉にアイシスが答える



名乗りをあげたのはオーズだった

「でも、一人じゃ荷が重いですよ」

「大丈夫。俺にはこれがあるから」

そう言ってオーズが取り出したのは緑色のコアメダルだった

「でも、さっきの戦いでカマキリのメダルは……………」

「大丈夫。もう回復してるみたいだから」

オーズはそう言っ

ピラニア・ネメシスの群れに向かうとオーズはすべてのメダルを抜き取り、順番にクワガタ、カマキリ、バッタのメダルをセットしスキャンする

『クワガタ！カマキリ！バッタ！ガータ・ガタ・ガタキリバ！ガタキリバ！……』

## カタルシスNo10・分身とドリルと眺める槍兵

『クワガタ！カマキリ！バツタ！』

オースキャナーがそう発音すると、目の前にカワガタ、カマキリ、バツタの紋章が出現しオースの頭部に重なるように出現し列となるようにカマキリ、バツタと並び

『ガータ・ガタ・ガタキリバ！ガタキリバ！！！！』

と独特な歌が流れる

するとクワガタ、カマキリ、バツタの紋章は一つの円へと融合され胸のオーラングサークルへ吸収されるのと同じにタカヘッドは二本の角を持つクワガタヘッドに、クジャクアームはカマキリソードを備えたカマキリアームに、チーターレッグはジャンプ力を備えたバツタレッグへチェンジされ

「うおおおおおおおおおお！！！！！！」

大きく雄叫びを上げる

空気が張り詰め、トーマたちはビリビリと虫系グリードのウヴア、オースガタキリバコンボの威圧を受けた

「あれがオースのコンボチェンジ……………！！！！」

初めて直で見たオースのコンボチェンジにトーマは声を漏らす  
するとオースは海にいるピラニア・ネメシスの群れに向かい走り出す  
オースに感づいたピラニア・ネメシスたちは一斉にオースの方を向き海から飛びだしオースに襲い掛かった

その光景を見たトーマ、リリイ、アイシスは肝を冷やした。だが、オーズが分身した。一人から一人とネズミ算のように増え、最後には五十人にまで分身していた

オーズは両腕のカマキリソードを展開しピラニア・ネメシスを片っ端から切り上げ、クワガタヘッドから放たれる雷でピラニア・ネメシスを次々と倒していき、地面が緑に侵食される

「このままでは、やられる」と本能で感じたピラニア・ネメシスは空中で一点に集中し巨大ピラニア・ネメシスが誕生する

巨大ピラニア・ネメシスは分身しているオーズを片っ端から薙ぎ払い、本体と思われるオーズに噛み付きそのまま海へ引きずり込む

「火野さん!!」

オーズが海へ引きずり込まれ声を上げるアイシス

「フェイトさん!早く火野さんを助けに!!」

アイシスがフェイトに言うが首を横に振られる

「くっ、トーマ!!」

次はトーマに言うが反応は同じだ

「皆さんもういいです!!私一人でも助けに……」

危機的状況にアイシスは一人でもオーズを助けに向かおうとするが

「大丈夫だよ。アイシス」

「え……?」

トーマの声に引き止められた

「オーズのコンボはガタキリバだけじゃない。それにいま行けば間違いない巻き添いを受けるよ」

「それってどういう………」

アイシスがトーマにどういう意味か聞こうとしたその瞬間

『シャチ！ウナギ！タコ！シャシャシャウタ！！シャシャシャウタ！！！！』

と海から歌が響く

すると水面から液状となったオーズが現れ宙に浮きながら実体となる  
オーズは噛み付かれた瞬間、緑のメダルを抜き取り青の、メズールのメダルを入れ替えスキャンした。いまのオーズは水棲系メダルを使つて変身したオーズシャウタコンボだ

そしてオーズはベルトのメダルをスキャンする

『スキャンング・チャージ！！！！』

さらに巨大ピラニア・ネメシスは水面から飛びだし浮いているオーズに噛み付こうとするがオーズは再び液状となり巨大ピラニア・ネメシスの背後に回ると両腕のウナギウィップでヒレを縛り固定しタコレッグの触手を高速でドリルのように回転させ必殺技、オクトバニツシュを発動し巨大ピラニア・ネメシスを背後から貫く

「セイヤああああああああああ！！！！」

巨大ピラニア・ネメシスは背後から貫通させられ、奇妙な叫び声を上げ爆発する

ピラニア・ネメシスを構築していた鮭は海の中へ落ち、取り付いていたカタルシスは黒くなり地に落ちる前に灰化する

オーズは砂浜に着地すると変身を解除しオーズシャウタコンボから火野映司という人間の姿へ戻る

フェイトたちはそれと同時に映司の元へ向かう。トーマもリリイとの融合を解除し制服姿となる

「映司さん、お疲れ様でした」

「うん、連戦はちよつときつかったけど……」

「そういえば、下水で何が？」

フェイトは下水であつた事を映司から聞こうとしたが

「あー……、それは本部に戻ってから、気になる事もありますし。それより下水道酷いことになってますから、まずそれから」

「そうですね。みんなこれから下水道の調査を行います。確実準備に取り掛かってください」

「……了解!!」「……」

とフェイトと映司以外の全員が敬礼し下水の調査をした

オーズの戦いを遠い位置からある男が眺めていた。ランサーだ

「ほお、まさかあれだけのネメシスを倒すとはなかなかの腕だ……」

……」

彼がそう呟くとピリリリリとランサーの端末の電子音が響き、それに出る

「はい。はい、はい、わかりました我が主」

ピツとランサーは端末の電源を落とし

「次は取らせてもらっぞメダルの手、ディバイダーシュトロゼック」

そう言い残しランサーは光子し消滅する

## カタルシスNo.10・分身とドリルと眺める槍兵（後書き）

これからしばらく、この作品の連載スピードを落とします

理由はフォーゼがまだ中間フォームも出てないのでそうします  
では次回をお楽しみに

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1063x/>

---

魔法戦記リリカルなのはF & O s

2011年11月12日03時20分発行